

## 特攻隊員の広島被爆体験

# 忘れられぬ8月6日

喜多 康巳

私は昭和4年生まれで旧制中学2年生のおり、学徒動員令が発令され軍需工場に、また、学徒兵として軍隊にと次々に徴用された。当時は徴兵制度であり先生方も軍隊へと勧めておられ、陸軍特別幹部候補生受験に合格。直ちに香川県小豆島土庄町の船舶兵教習所に入隊。3ヶ月教育を受け種々の試験を受け、㊦(マルレ)要員として広島呉、江田島幸浦の㊦攻撃隊特別訓練所で同年兵数10人と共に教育を受けた。㊦とは正式名称を四式肉薄攻撃艇という。陸軍で唯一の量産特攻艇で、比島決戦以後使用されていた。自動車エンジンを用い、速力20ノット以上、120キロ爆雷を両舷に各1個持った特攻艇であった。



特攻艇マルレと私（前列左端）

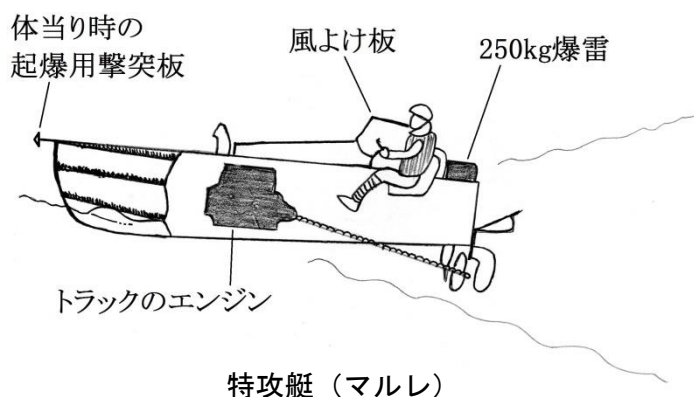
朝日新聞広島支局『爆心』65頁より

卒業前に沖縄が米軍に占領され、内地の空襲が毎日のごとくあり、米  
国太平洋艦隊攻撃隊員として特別  
訓練が毎夜々、夜間訓練で、昭和

20年8月6日は基地に帰るおり、空襲警報が発令され数十分で解除されたが、その  
おり、B29が西部方面に1機飛んで行くのを確認し、上陸した。落下傘がヒラヒラ降り  
てくるのを見て、まさか原爆が落下傘でとは思わず、兵舎に入り朝食を食う瞬間、稲  
妻の如き光があり、熱さは経験したことのない熱さ。飛び上がった瞬間、あの「ドカン」  
と爆音でガラスは破れるし、出入口のドアは飛び散るし、何が何だか判らず表に出る  
と、ご承知のキノコ雲が「もくもく」と空一杯にあった。

何ごとか判らず「直ちに軍装して宇品基地に集合」の命令。直ぐ㊦1人乗りである  
が爆雷を上げ4人程度乗り込んで直行した。約25～27ノットの速力があり、舟艇の一  
角を掴まなければ海中に落とされるぐらい、舟艇が立ち上がるため、20分ぐらいで

宇品棧橋上陸、と同時に女子中学風の生徒が「兵隊さん助けて」と泣いており、白い半そでから両手の腕の薄皮が指先に垂れ下がっており、肩、首等は赤茶色で痛々しい限りで、如何にすべきかと考えているおり、上官が「衛生兵が後から来る。直ちに現在のドームまで早駆け」の命令で



約20キロ程度の荷物、銃と共に軍服まで汗だく。到着と同時に作業服に着替え、大田川に浮かんでいる死体、数えきれないぐらい浮き並んでいた。1人1人を背に上陸。水を呑んでいるため重かったことは今でも忘れることは出来ない。

2日ぐらいは死体収容とともに、焼け残ったり壊れたりした民家の柱等々を井桁に組んで火葬することが任務であり、3日目ぐらいは地上の死体を収容。3日目になれば異臭で何ともいえず、命令とあらば断ることは出来ずただ、佛様の方々を焼却する。食事は当番制で、持参の米を飯盒で炊いても一般の人々が立寄って来るので皆さんで分け合って食うように渡し、自分達は倒れた民家から食糧品を探して拾い食うのが精一杯。当時、車もない頃に呉市国防婦人会の襷掛けの数人より「ニギリめし」の差入れがあり、衛生上云々は別とばかり、手掴みで口に入れたうまさは今でも忘れず、にぎりか好物になった一種でもある。

道路の市電は横倒しのままで乗客の方々を1人ずつ表に出し、焼死している方々もあり、中でも御婦人が身持ちであったのか出産されており、まだヘソの尾が繋がったままであり、2人一緒に火葬し、別に上官に渡した折は胸が一杯で涙が流れたことを思い出す。また軍需工場の土塀で、空襲解除で防空壕より出て一列に並んでおった折、爆風で土塀が倒れて数十人が頭だけ出して下敷になり兵隊さん水をくれということで吞ますと、数分で死んでしまうという状態であった。時間が早ければ多少の方は助かった可能性がと思ったこともあり、塀を割って引出したが胸より下は殆ど潰されておった。

米国から投下された一発で一瞬にして水槽や川、池と、水の有る箇所でも多数の犠牲者が出た。屍をみる度に腹立たしく思うばかり。また中年の奥様が子供を抱え「兵隊さん子供を一緒に連れて帰りたいが」と尋ねられ、見たところすでに他界しており「列車には死体は乗せません、何処まで」と聞いたおり、奈良までと言われ、小生も奈良出身であり上官に話したところ、火葬して持ち帰らせと許可を受け、トタン板で10

分ぐらいで火葬し梅干し壺を拾って来て持ち帰らせたが、復員後、親父より、実は広島でお世話になりましたと御礼に来られたと聞いて、小生は沖縄に行く体で自分も奈良ですと言ったが、住所も何も言っていなかったが、県庁市役所等々で問い合わせたことと、何処でも困っている人の身になって、親切にすることの大切さを知った一言でもあったと思う。

また野井戸に落込んだ死体を引き上げるよう、命を受け、機械もなくロープ1本で引上げる難しさも知った。陸上で2、3人にロープを引上げて貰うことにして、井戸に入ったところ、2、3人重なって井戸で死んでおり、死体にロープを結ぶ苦しさを思い知らされたことは今でも忘れることが出来ず、夢を見ることもある。

また、広島刑務所より応援に来たが、仕事にならず腹立たしくなって銃で叩いたこともあった。上官に叱られたのは自分であったが、銃を使用したためで忘れない一頁であった。このような悲惨な原爆は二度と起こさない、起こさせない活動が大事であると思う。

また、戦後昭和36年ぐらいから平成10年ぐらいまで、小さな個人店を開いておった。来客に米国より来た英語の高校教師がいた。そのデーブと呼んだ青年が、親父が広島原爆に関係があり、如何に「極秘」であっても知らぬでは通らないと自責の念を持っていると聞いて、一度来日をするよう種々話し、その機会を得ることができた。話して判ったことは、本人も原爆とは知らず日本上空で晴れた日にボタンを押せとだけ言われたこと、終戦後、事情を知ったことと、重量7トン弱の爆弾で、落下傘で落とすことで空中時間を稼いでおったこととであり、直下すれば与える被害範囲が限定されることとであった。

そして、ここまで種々書き述べたが、自分で考えながら、また被害状況を見て黒の被服等々、頭髪にしても殆ど焼けており、麦ワラ帽子の黒いアクセサリーが焼けて、麦ワラだけ残っているのも見て不思議に思っておった。現在北朝鮮、中国、ロシア、印度と近くの国々が所持しておることと、特に北朝鮮は何を起すか判らない国であり、如何にファッションの世の中でも夏の暑い日に黒の日傘、黒の衣服で世間をカッポしている若い女性をよく見るが、それこそ一瞬にして黒コゲで殺されると思う。白い三角布または白いタオル一枚を持ち歩くことが自己防衛になると思う。

昭和20年8月6日、世界で唯一日本が原爆被害国となった。その1人として何時までも語り続けることが大切であると感じ、70年前のことを思い起こして身体の続く限り語り部を続け、一般の方々に知ってもらうことが任務というか、天命だと思っている。